

2) “事件”の分析より

〔モンキー, 118 (印刷中)〕

3) 離脱前後の分析より

〔モンキー, 119 (準備中)〕

幸島野外観察施設

幸島は宮崎県串間市市木にある周囲約4kmの小島で、全島が暖帯照葉樹林でおおわれ、天然記念物として保護されている。この島のサルについては1948年より研究が開始され、わが国の生態学者によるニホンザル研究の当初から、大分県別府市高崎山のサルとならんで格好の対象とされてきたが、本研究所の設立に当って、その対岸に施設を設け、共同利用研究所としての本研究所の一環に組みこまれることになった。具体的には、本研究所設立の翌年に当る昭和43年に新設され、地元の協力で敷地を確保の上、研究棟1棟(98m²) 宿舎2棟が建設され、ジープ、船外機つき4人乗りボート、若干の研究備品の設備がある。この施設の円滑な運営と幸島ニホンザル群に関する継続的研究のために、現在、若干名の技官などが常駐しており、将来はこの施設専属の教官も配属される予定である。

幸島ニホンザル群については、過去20余年にわたる、個体の履歴と個体間の血縁関係が判明しており、生態学的、社会学的研究に対してはもちろん、その他の分野からのニホンザル研究に対しても、研究上重要な資料となっている。すでに本施設は、幸島ニホンザル群に関する所内外の研究者による研究に役立っているが、研究棟の増築、研究員宿舎の建設などが今後に予定されており、整備途上の現状にある。

研究概要

1. 生態学的研究

河合雅雄・東 滋・三戸梅代・三戸サツエ*

幸島の群れは1948年より群れの生活について連続観察が続けられてきた。各個体は全て個体識別がなされ、戸籍簿が作られている。これを基に、出生、成長、死亡、出産期、性交期、ポピュレーションの動態に関する研究が行なわれている。また、体重の定期測定、食物リストの作製も行なっている。

2. 社会学的研究

河合雅雄・三戸サツエ

社会構造、社会関係を歴史的変遷の過程においてとらえ、1952年以来継続研究を行なっている。とくにリーダー制、順位の形成とその機構、ヒトリザルの問題、社会的成長といった問題に興味がむけられている。また、性行動、性関係の詳細な分析が進められている。

3. カルチュアに関する研究

河合雅雄・川村俊蔵

1953年以来、この群れにおけるカルチュアの行動について継続観察を行なっている。新しい行動の獲得過程、その伝播の分析、理論的考察が進められている。

4. あそびに関する研究

三戸梅代

(社会部門の項参照)

5. 血縁関係の復元に関する研究

岩本光雄・河合雅雄・三戸梅代

幸島の群れは母系中心の血縁関係はわかっているが、どのオスの子であるかが不明である。父系関係を明らかにするために、全個体の外見特徴を記載し遺伝学的アプローチを進めると共に、性関係を追跡して、どのオスの子であるかを決定しようとの試みがなされている。この研究は岩本が中心に行なっている。

6. ロコモーションの研究

岩本光雄・石田英実

幸島のサルは、物を両手でもって2本足でよく歩く、この点に着目して、8mm, 16mm シネカメラで歩行様式を撮影し、2足直立歩行の基礎的研究の準備を進めている。

7. その他

岩本光雄・野沢 謙

全国のニホンザルを対象に、岩本は指紋、野沢は血液成分による集団遺伝学的研究を行なっているが、幸島のサルもその一つの対象としてとりあげ、この種の研究を行なっている。

所外研究員による研究は次の如くである。

1) コーディング法による性行動の分析

都守淳夫(J. M. C., 昭45, 46 共同利用研究員)

性行動をコーディング法によって詳細に分類し、行動のパターンをおさえ、個体差を明らかにし、社会関係によるひずみとの関連において、性行動を分析する。この問題は実験室とフィールド研究との密接な関連のもとに行なわれており、方法論についても興味ある結果が期待される。なお、性行動、性関係を通じて、社会構造を分析するための手がかりが進められている。

2) ニホンザル社会構造と社会行動

森 明雄(京大・理・自然人類, 昭45, 昭46 共同利用研究員)

サルたちの「出遣い」を中心に、個体関係、コミュニケーションを分析する。それに基づいて社会構造のメカニズムを解析しようとの試みである。初年度はオトナを

*教務補佐員

中心に研究し、しだいに若い世代の出遣いについて歩を進めていく。

3) ニホンザルの環境評価

木村光伸(京大・農・林学)

ニホンザルが自然をどう認識し、それに基づいてどのように行動しているかを、土地利用という観点から研究を進めている。具体的には幸島の植生を調査し、植生、地形に応じて、採食、とまり場、休息場、遊牧ルートをどう決めているかの研究を行なっている。

4) ニホンザルの群れの生物経済学的研究

岩本俊孝・小野勇一(九大・理・生物)

摂食量、排泄量を量的に把握し、一応の同化量を算定する。一方一日の移動量を出し、代謝量を算出する。そのために、当面投与された人工飼料をどれぐらい食べているかを押え、ついで自然食物の摂食量の量的把握に進む。また、糞の排泄、一日の移動距離についてもデータを集めている。

5) テレメーターによるアクティビティーの測定

小野勇一・東和敬・土肥照夫(九大・理・生物、昭44 共同利用研究員)

野生ニホンザルのアクティビティーの研究は、今までにほとんどない。テレメーターを使ってアクティビティーを測定し、日周リズム、移動量などを性、年齢、ステータスを基準に調べる。なお、運動量については前記岩本の研究と関連させて仕事を進めていく。この研究には、河合、三戸、東が共同参加している。

研究発表(1968年4月~1971年3月)

論文

1) ポスザルの性と支配

河合雅雄

〔自然, 26(2), (1971)〕

(関係論文は社会部門参照)

学会発表

1) テレメーターによるニホンザルソリタリの研究

河合雅雄・吉場健二・東 滋・安藤 滋
日本生態学会第15回大会(1968)

2) 野生ニホンザルのアクティビティーの測定

河合雅雄・小野勇一・三戸梅代・安藤 滋・東 和敬
日本生態学会第17回大会(1970)

サル類保健飼育管理施設

久保田競(兼), 登倉尋実, 松林清明

昭和43年6月, 研究所の第1期工事が完成するに伴い, いよいよ研究活動が始まろうとした時, 所内教官, 共同利用研究者への, サルの供給に関する重要な問題が発生した。これは, 以前から予想され, 憂慮されていた

ことではあったが, 研究用に使用するサルの入手困難という状態が, 現実となった。たとえば, 44年1月, 神経生理部門で, 慢性実験に使うべく成熟したマカク(種は問はず, 大きさも, モンキーチュアにつけられるものという, ゆるい条件)を求めたが, 所内でやりくりがつかず, また, 入荷の予測もつかなかった。

同年4月, サル類保健飼育管理施設が, 附属施設として認められたが, 研究所開設以来, 現在に至るまで, 所内での研究用サルの飼育, および保健管理についての対策は長期の展望にたつて事を行なうことができず, 応急対策に追われるのみであった。そのため, 当研究所内でサルを使う研究者に, 多大の不便をかけ, 研究の進捗を著しく妨げている。現在, 初期に比べ, かなり改善されたとはいえ, 極めて不十分な状態で, 早急に改善されねばならない。

40年度概算要求書(草案)は, 霊長類研究所開設の基礎になったものであるが, そこで, 9部門, 5附属施設を要求している。この附属施設の中に, 幸島野外観察施設, 情報センター, 資料室, 飼育室(実験用サル飼育舎), 工作室があげられている。サル飼育室においては「飼育環境, および飼料を一定化すると共に, 検疫, 衛生管理などを厳正に行なって, 飼育動物を健全に保持し, 動物実験の精度を高め, 研究の進展をはかることを目的とする」とある。

飼育室としては, 990平方米(300坪)2,850万円を要求している。また, 人員としては, 研究所全体で, 133人を要求している中で, 職員1. 技官2. 計3名を, 飼育室要求としている。研究所内で飼育するサルとして, 3年計画で大型60, 中型1,050, 小型300, 計1,410頭を予定し, その為の設備として, 4,895万円, 他に, レントゲン設備, 蒸気滅菌設備などを特殊附帯設備として要求している。サル購入費としては, 5,400万円が要求されている。

この目的を満たし, 1,300頭ものサルを管理することが, 行政職員3名で可能とは, ととても考えられないし, 990平方米の飼育室に, 1,000頭以上ものサルは入れられない。現在の地下のケージ室の面積は335平方米である。サル施設の使っている面積は1,320平方米である。検疫もやることになっているが, その具体案は, 全く記されていない。このことは現サル施設職員に非常な苦勞をかけるという結果になった。このような事情の第一歩の打開策として, 近藤所長はむづかしい不動産購入を行うことを決め, 幸いにも昭和45年度に予算が認められたが, 購入面積は, 約4,000坪に終わった。現在, 新敷地に検疫舎, 飼育棟, 放飼実験場などの建設にかかるところである。